異世界 と 竜狩人

薬草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界　と　竜狩人

【Ｎコード】
Ｎ６７９０Ｍ

【作者名】
薬草

【あらすじ】
砂漠で井戸を降りたら、異なる世界に繋がっていた。
迷い込んだ世界には至宝を護る扉と、翠の鱗を持つドラゴンがいる。
モンスターハンター最高位、ランク９を持つラキアは、熱に浮かされるようにそのドラゴンに挑んだ。
……そんな感じの、モンスターハンターの二次短編小説です。
作品のテーマは『国民的ＲＰＧをモンハン的に解釈してみた』
要するにクロスオーバーで、実験作品です。

前編　『ドラゴン』（前書き）

砂漠で井戸を降りたら、異なる世界に繋がっていた。
迷い込んだ世界で、それでも狩人はまるでそれが使命であるかのように、ドラゴンを狩る。

……そんな感じの、モンスターハンターの二次短編小説です。
作品のテーマは『国民的ＲＰＧをモンハン的に解釈してみた』
要するにクロスオーバーで、実験作品です。

が、

クロス先がキャラ付けやストーリー性のほとんど無いファミコン世代のＲＰＧなので、知らない方には単なるモンハン二次ですｍ（＿＿）ｍ
とはいえたぶんコレを読んでいるあなたも知ってらっしゃるんじゃないかなぁと思いますので、気付いたらその時点でにやりと笑って下さいませ。

前編　『ドラゴン』

ジャンボ村の集会場にある掲示板に張り出された依頼に、集会場内のハンターがどよめいた。

ハンターランク９『Ｒａｋｉａ（ラキア）』行方不明。至急捜索を求める。
ギルドマスター

ラキアは近隣の村も含めて、この集会場に所属するハンターの中でも郡を抜いた実力を持つ最高位の女ハンター。
その彼女が忽然と消えたというニュースは、少なくない衝撃を他のハンターに与えていた。

「やっぱり扉か、しかもまだ新しいな。最近開けた跡もある。」

何故こんな所に扉が？　などと思う。

いやそもそも、この状況そのものがおかしい。

私はティガレックスを狩るために砂漠に赴いたはずなのだ。

それがどうしたことか、気付けばこんなじめっとした洞窟の中に居る。

確か一旦ベースキャンプに戻って、地下を奔る洞窟に降りようと井戸に飛び込んで……

ダメだ、そこから先の記憶が無い。

もしや夢かと思ってほっぺを抓ったりもしてみたが、ちゃんと痛い。

愛用する黒刀【終の型】の感触もリアルで、よく手になじむものだった。

ナルガX一式にリオソウルZアーム。どれもG級に上がってからの私を支えてきた相棒たち。

こいつらの感触を私が忘れる筈が無い。

「さて、どうしようか。どう見ても人工物だよね」

移動中に適当に進んだら地図に無い場所に出てしまったなんてことはこれまでも何度かあったが、ここは何処まで行っても見覚えのある景色にならない。

というか、そもそも砂漠に洞窟など無いはずだった。

そこに来て、この扉。試しにこつこつと叩いてみると、返って来たのは硬質な木の感触。しっかりと金属で縁取られた頑丈な扉のようだ。

「まぁいいや、とりあえず開けてみよう」

ごぞごぞとアイテムポーチを探ってみる。

どうやら着地に失敗した事でかなりのアイテムがダメになってしまったようで、ポーチの中がぐっしょりと濡れている。

ダメになったのは、さっき調合したばかりの閃光弾４つに、回復役グレート2本。クーラードリンクに、

「うわ、秘薬が割れてる」

どうもかなりの距離を落ちたらしい。中々の被害だった。

いやむしろ、秘薬が割れたことよりも身体に怪我が無かったことを喜ぶべきかもしれない。

さて気を取り直して、残っているものはドキドキキノコに回復役グレート、調合の書？～？、素材玉、光蟲……

「ん、こいつがまだ残ってた」

大タル爆弾Gの起爆用に用意した、小タル爆弾Gが3個。さっそくそのうちのを2個重ね、口火をつけて退避する。

爆炎を避けるために洞窟の角を曲がった直後、背中に閃光とけたたましい音が迫った。

私の自慢の赤髪が爆風に舞い、肌の露出が多いナルガ装備には少々うっとおしい熱風と土埃をやり過ごした私は再び扉の前に戻り、気合一発。

かんぬき目がけて全力のケンカキックを叩き込むと、嫌な音を立てて扉が開いた。

ふと。壊してよかったのだろうかと今さらながらに思ったが、まあいいかと思い直す。

「あ――――――いる、ね」

漂ってきた臭いに、意識を狩人に切り替えた。
扉を開けた瞬間に、開放された獣臭と腐臭。生臭い血の匂い。
それなのに、温度が数度下がったかのような張りつめた緊張感。
ハンターとしての、否、人間としての本能が告げる。
これは間違いなく、生態系の頂点に立つモノのねぐらの空気感だ。
奴らにとって、人間もまた餌。私は無意識に、唇を舐めた。

背中のアイテムポーチを下ろし、幾つかのアイテムは腰の携帯用ポーチに移し替える。
そして残りを洞窟の壁に立てかけると、黒刀の鞘にある抜け落ち防止ののロックを外し、最後の小タル爆弾Gを脇に抱えて慎重に奥へ進んだ。
さらに数度の曲がり角を経て、最奥へとたどり着く。

「ははっ、ご機嫌だね」

音が聞こえた。唸るような、響く様な重い音。それがいびきだとすぐに解った。
最後の角を曲がり、ドーム状になった洞窟の一番奥の壁の前。
そこに、一匹のドラゴンが蹲っている。

「新種、かな？」

そのドラゴンは、これまで見た事も無いカタチをしていた。
猫のように身体を丸めて眠る姿は竜種共通のようだが、その膚は川藻のような翠で、滑らかだ。
竜鱗の滑らかさと密度は、同じ緑の鱗をもつリオレイアよりも、

どちらかと言えば古龍のナナ・テスカトリに近い。
古龍の様に六肢（両腕、両脚、両翼）を持つ訳ではなく、かといって飛竜のように翼が腕状に変化している訳でもない。
あえて言えばラオシャンロンに近い形をしたドラゴンだが、サイズは一般的な飛竜と同等かやや小さい程度。

しかし侮る訳にはいかない。翼を持たない代わりなのか、腕が、そして脚が恐ろしく発達している。
特に地面を蹴る際の要となる後ろ足の太腿が、見ただけで解るほどに発達していた。
一目で私は確信する。この竜は、強いと。

「ふふっ」

心臓が高鳴る。寒気が背中を撫で、恍惚に脚が震えた。
同僚は、こんな私をみて病気だと言ったが、そんな事を言われなくても自覚はあるのだ。

狩猟依存症。
私はこの病をそう呼ぶ。

人間など一撃で粉砕するモンスターの攻めをかいくぐり、私の刃が肉に喰い込む感触が、絶頂しそうなほどに好きだ。
降りかかる温かい血に、命を感じる瞬間が堪らない。

「新種のドラゴンちゃん、お目覚めの時間だよ。私と殺し合ってくれる？」

背中をぞくぞくと這い上がる酩酊にもにた期待感に唇を歪ませて、私は小タル爆弾Gの導火線に火をつけた。

それをそっとドラゴンの頭の横に置く。
何度も繰り返した、戦いの凱歌を、私は寸分の狂いも無く謳い上げる。
飛び退いた私の背後で、閃光と熱がドラゴンの額を焼いた。
『ギュオオォォオオォォォォーーーー！！』
「アハハハハーーー！！」
一方的に叩きつけられた宣戦布告にドラゴンが驚くその間隙を縫って走り込み、私は背中から一息に抜いた黒刀を大上段から振り下ろす。
これで決まるなんで思っちゃぁいない。決まるようなら興ざめだ。
はたしてその黒い刃は、翠の鱗を少しも傷つけることなく地面へと吸い込まれた。
一瞬のバックジャンプ。飛び退いた先で、ドラゴンが燃えるような怒りを滾らせた瞳を私に向ける。
そう怒るなよ。
殺し合いにおいては、全てが肯定されるんだから。
「はぁ〜っ」
熱い、濃密な息を口から吐き出す。
高ぶり、頭の中を飛び回る熱を冷まして思考を呼び戻す。
意外だったのは、その時間があった事だ。
相手のドラゴンは、何故か感情に任せて襲いかかる事をしなかった。
古龍種、いやそれ以上の強かさに嬉しくなる。

「　　」

私は黒刀を脇に構え、相手は後ろ脚に力を溜めた。
勝負は恐らく刹那の取り合いになる。

「――――――ッ！！」

一瞬、目がくらんだ。
眼前にはオレンジの炎。目くらましに放たれた炎のど真ん中を、ドラゴンが突っ込んでくる。
それを私は斜め前に転がる事によって回避し、軽く炎に焼かれながら刀をふり抜く。
前転のエネルギーを腰の捻りで刀身に乗せた一刀は、しかしドラゴンの鱗を僅かに削るだけにとどまった。
ドラゴンが、私の攻勢の気配を察して更に前に跳んだのだ。

「はっ！」

だが、こちらも伊達でG級を名乗ってる訳ではない。
素早く体勢を整えると、相手が反転するよりも早く、両手突きを左足の付け根に突き刺す。
深く刺す事は出来なくとも、少しずつ傷をつけて失血を狙うのは大物狩りの定石だ。

「甘いよ」

剣を引くと同時にバックステップする。
案の定、ドラゴンは反転と同時に首を突きあげ、斜め下から私を

跳ね上げようといた。
しかしそれは私には届かない。
予測通りの軌道を描くドラゴンの首を拳ひとつ分ほどの距離でやり過ごし、がら空きの首筋目がけて袈裟斬りを――――――

〜〜〜〜〜！！？

突然、ドラゴンの白い腹が目の前に現れた。
さらに横からの強烈な衝撃が脳をゆすり、私の身体を宙に飛ばす。
放物線を描いて洞窟の壁に衝突し、そのまま落下した。

「く、はっ」

何が起こったのか一瞬解らなかった。
相手は突きあげが当らないと見るや、さらに身体を廻して身体を横に向け、後ろ足を蹴り出して体当たりをかましてきたのだ。
空振りの隙を狙って踏み込んでいた私に逃げ道はなく、咄嗟に地面から脚を放して後ろに飛ぶのが精いっぱい。
お陰で潰されることこそ無かったが、背中を岩壁に強打するハメになった。

「う、くふっ……」

さっき食べた肉が口内の戻ってくるのを、喉を鳴らして飲み下す。
幸か不幸か開いた距離を利用して、ポーチから回復役グレートを取り出して胃液を押し返した。

別に傷が癒えるとかそんな魔法みたいな事は無いが、胃液のいがらっぽさが無いだけでもだいぶんマシだ。
傷はいえなくとも、薬草とハチミツの薬効で体力は多少なりとも回復するのだし。

「ふうっ」

空になった瓶を投げ捨て、ドラゴンに向き直る。
奴は喉を鳴らすばかりで襲ってこなかった。
勝者の余裕か、それとも警戒してか。
いや、そんな事を考えるのはもう止めだ。
こいつは猛者だ。なら何かを狙っているに決まっている。

「　ッツ！」

姿勢を低くして真っ直ぐに駆けだす。
直後に吐かれたのは、火炎の息。
その範囲はけた違いで、扇状に吐きだされた炎は洞窟の地面を広範囲に焼き、私の膚を焦がす。
避ける余裕など無い私は眼を瞑り、腕で顔を保護してその中を突っ走った。

元々火には弱いナルガ装備だ。
これは火傷箇所に回復役グレートをもう一本だなと思いながら、爪撃の心配が無い炎の　中　を一気に突っ走った。
そのまま頃合いをみて斜め右前に飛び込み、小さく刀を振る。

そこまで肉質が硬い訳ではなく、弾かれる事こそ無いが、密度の高いこいつの鱗に刃筋は立たない。
だから相手の左横を取っても、贅沢は言わなかった。

『ギリュゥゥ！！？』

狙ったのは腕ではなく指。
刃毀れ覚悟で地面に刃を叩きつけ、床を捉えていた４本の指のうち２本を叩き斬る。
流石にこれは効いたのか、ドラゴンが苦悶の声をあげてのた打ったのをチャンスと見て、さらに攻めかかる。
暴れるドラゴンの身体から比較的柔らかそうな白い腹を選択して突きを打ち込み、鱗を裂いたとみるや後ろ足を踏みだして前腕で黒刀の背を横に押す。
まるで布を裂くような感触と共に、腹の白い鱗を引き斬り血飛沫が舞った。

さらに横に飛んで逃げるドラゴンの傷を狙って再び突き、返しに下から斬り上げる。
三撃目の斬りおろしは奴が身体を回転させた事で不発に終わったが、問題は無い。
Ｔ字に裂いた相手の左わき腹の傷は、手応えからしても浅くはないだろう。
対してこちらは、迫る太い尻尾を躱し切れないと受け止めた前腕も無事。火傷もそれほど酷くない。
この程度の傷に対する戦果としては十分すぎる程だった。

「ハハッ、まだ終わらないよね？」

『ギュオォォオオォォオオォォオオォォオオォォーーーー！！！』

洞窟が揺れた。
モンスターには、ある程度の傷を与えると逃走を図る奴も多い。

けど、こいつは違うらしい。
低い唸り声と、血走った紅い眼から伝わってくるのは、明確な殺意。怒気。
それを理性で抑え込んでこちらの動きを伺っている。

「　ッと！」

僅かな起こりを見た瞬間に斜め前に飛び込み、ドラゴンの突進を躱す。
ほんの数瞬前まで私がいた空間をドラゴンの牙が噛み砕き、空ぶったとみるや繋いできた尻尾が私の今いる空間の少し上を薙ぎ払う。
地面に両手を突いて這いつくばる様にそれを避けた私はそのまま四肢の力で後ろに飛び退き、小さく円を描いて落ちてきた尾を躱しきった。

楽しい

地面に叩きつけられた尾の先を切り飛ばす。
今度は泣き声すら上げず、代わりに襲ってくるのは尻尾での右フック。
それを左肩に受けて吹っ飛ばされた。

「ア、アハハハ！！」

調合してある最後の一本を使おうと思ったけど、止めた。
まだ早いと思ったんじゃない。
こいつが、何かあると構えているのを感じたからだ。

『フゥ〜〜…』

憤怒が高まるにつれて張りつめていく空気。
ドラゴンが小さく唸る。

宝を護る防人

そんなイメージが脳裏に浮かんだ。
こういう時の勘って奴を、私は信じる事にしている。
なら、こいるが護っている『宝』は何だ？

どうでもいいか、そんなの

重要なのは、何かがあるからこいつは逃げないということ。
ならば、こいつの命は私が奪う。誰にもやるものか。私のものだ。
だから私に勝てたなら、この命を呉れてやる。

「シャアァァッ！！」

身体から突っ込んで来る猛突進を紙一重で見切り、剣先でかすめるようにして真一文字の傷を刻む。
躱された事を知った直後に尻尾を振って重心を回転させ、前足を起点して反転するとこちらに飛びかかってくる。
それに対して私はカウンターの方法を　考　え　た　た　め　に反応が遅れた。

好調に浮かれ過ぎていたと自らを叱責する。
考える前にまず動くことが至上とされる大型モンスターとの戦闘で、足を止めて考える事は自殺と同義だ。
脳内で弾ける快楽が狩人の心得を忘れされ、私をただの人間にした。

「ぎっ――――――」

咄嗟に身体を前に投げ出して顎の下に飛び込み、轢きつぶされることで致命の牙を回避する。
声が潰れる中で、さらに前に転がってドラゴンの下から抜け出した。

「うわぁ……」

自分が大きな影に覆われた事を知った。
圧し掛かる様な気配を頭上に感じる。
見上げれば、両腕を振り上げて二足で直立するドラゴンの姿。

「あっちゃぁ～」

転がった後の体勢で回避など出来る筈が無い。中途半端は止めて、私は歯を食いしばる。
折られる訳にはいかない私の刃を脇に投げ、蒼火竜の鱗と皮で造られた篭手で身体を護る。
高所から撃ち落される鋭い爪と身体の間に両腕を挟み込み、全身の筋肉を一息に緊張させてドラゴンの掌から伝わる衝撃を受け止めた。

『ギャオオォォォォーーー』

「あがっ！！」

一撃。

身体がハネた。

『ギィッ！！』

二撃。

ドラゴンはバウンドした私の身体を腕で叩くと、そのまま壁に叩きつける。

左肩のあたりで嫌な音がした。

「うぐ……」

三撃。

再度バウンドして黒刀の隣にうつ伏せで落ちた私の背中を、ドラゴンの掌が押しつぶす。

ただでさえ薄いナルガXメイルでは衝撃を吸収しきれず、鋭い痛みが背中を奔った。

ドラゴンは私の背中に爪を刺したまま残った指で身体を掴み、口元まで持ち上げる。

私の両腕にも背中にも、相棒の姿は無い。黒刀は、いま私の血の滴りをうけている。

そうして私にもう危険が無い事を確認すると、その顎を大きく開いた。

ドラゴンの喉の奥が、赤く、光る。

最後まで、油断しない奴だ。

眼球の真ん前で弾いてやろうと思ったのだが、丁寧に詰めてくる

ドラゴンのせいで結局賭けに出る事になってしまった。

「プレゼントだ。意地悪せずに受け取ってくれ」

アイテムポーチに忍ばせた、最後の攻勢アイテムを放り投げる。
ティガレックスをその場に固めるために用意したそれは、上手くドラゴンの上顎を掠め、天井近くまで上昇する。

瞬間、閃光が辺りを包みこんだ。

あらかじめベースキャンプで調合しておいた最後の閃光弾を投げ、ドラゴンが驚いた隙に爪から脱出する。
背中の止血は後まわし。
勝機は今と黒刀を拾い、ドラゴンの後ろ足の裏。アキレス腱を渾身の力で斬りつけた。
刃は半ばまで足に喰い込み、反動で私の身体が軋む。

「くっ！」

けれど、止まったら殺られる。
前方の空間、前足と後ろ足の間を前転ですり抜け、体勢を立て直す。
目の前に、健を断ち切られてなお姿勢を崩さないドラゴンの顔があった。弾けるように顎が開く。
ぬめった唾液と、赤い口内。そして白い牙が目の前に晒される。
けれど、それは失着だ。
忘れて無いか？　さっきと違い、私の足は両方とも地面についている。

「はっ！」

脆弱な人間が手に入れた、最大の特性がこれだ。
鎧の加工時に特殊な処理を施すことで、人間はモンスターたちがもつ特殊な力を武装する事に成功した。
ナルガ装備に宿るナルガクルガの魂は、装備者の身体を軽くし、一息にドラゴンの頭の横に滑り込む。

「喰らえ！！」

丈の長い黒刀では、そこを狙うには遅い。
新米ハンターならばそれは反則だと言うかもしれないが、生憎とそんな物は殺し合いには存在しないと後に知るだろう。
私は剥ぎ取りの為に背中に刺したナイフを引き抜くと、逆手で持ち、首を下げたドラゴンのそこに躊躇い無く突き刺した。

『ギュオォォォオオーーーーーーーーーーーーーーーーッ！！！』

ドラゴンの絶叫が洞窟を満たす。
流石にあれは堪えただろう。
刃が薄いために衝撃に弱く、戦闘には到底使えないが、その反面、恐ろしく鋭い。
装甲の様な皮膚すら斬り裂き、剥ぎ取る大型ナイフが今、ドラゴンの右の眼球から生えていた。

「はっ！」

怒りに塗れたドラゴンが低く唸りながら腕を振るうが、そこにはもういない。

手負いこそ最も危険な事くらい知っている。

背中と腹の奥に重く残った痛みをこらえながら、ひとつひとつを確実に避けていく。

焦りは必要ない。何故なら経験上、こういう時の竜種が取る行動は決まっている。

強者であるが故に、

人間とは根本的に違う喉を持つが故に、

奴らは、吼える。

『ゴゥアアアアアアアアアアアアーーーーーーーーッッ！！！！』

洞窟全体が震え、細かな砂が天井から剥がれて落ちる。

手で耳を塞ごうとも関係の無いバインドボイス。けど、無駄だ。

人間はこの音による拘束に対抗する術を必死に考え、見つけ出した。

音殺しの業は、いま私の鎧に宿っている。

「最初っから、音なんて殆ど聞こえて無いんだよ」

だからこそ、閉鎖空間で爆弾を使うなんで馬鹿が出来た。
絶音の力を纏う私にとって、咆哮は単なる巨大な隙。
ドラゴンにしてみれば、止まるはず私が自分に向かってくる姿は衝撃だっただろう。
体内で練り上げ、正に吐きだそうとする手前で、動きが硬直している。
それを見逃す私ではない！

「貫った！！」

間合い半歩前で前足を大きく踏み出し、地面に沈み込む。
刃の先が指向するのは、開いたドラゴンの口の、更に奥。
力強い踏み込みとともに足の指から始まった力の連動は、膝、股間節、腰、背骨、肩、肘で加速され、手首を通って刃を突き抜ける。
全身に漲らせた戦氣が刃に集中し、ドラゴンの上顎から頭部へと進行する。
深く曲げ、力を溜めこんだ前足に後ろ足を寄せ、斜め上にむかって一気に開放した。
手に伝わる柔らかいものを突き刺す感覚が、私にドラゴンの脳を貫いた事を知らせる。
刹那遅れ、温かい血潮が私に降りかかった。
ああ、やはりこの瞬間は――――――――――――――――――――――――

「――――――ッッ、アアアァッ！！！」

後編『女神』

「――――――ッッ、アアアァッ！！！」

とろりと私の意識が溶けた瞬間、身体が燃え上がった。
炎に塗れるナルガクルガを幻視する。
私の刃がドラゴンの脳に達した直後、喉の奥に溜まっていたであろう焔が、間欠泉のように噴き出した。
口内を満たす血とともに吐き出されたそれは私の全身を焼き焦がし、呼吸器を一瞬で蹂躙する。

「が、ふっ……」

迂闊だった。
考えてみれば、このドラゴンはさっき炎を吐こうとしていたのだ。
眼を抉られた激痛と怒りによる咆哮を間に挟んだ為に遂に吐きだされることが無かったそれを今吐き出しただけの事。
炎を吐くのに必要な溜めは、とっくに終わっていたのを忘れて口を狙った私のミスだ。

「うん、ふぅ、見下ろすんじゃ、ない。この野郎……」

しかも驚いた事に、脳を傷つけられてなお、ドラゴンは生きていた。
頭の中と口を貫通され、血液と髄液に呼吸を詰まらせながら、それでも奴はそこに在り続ける。
何故、そんな事が出来る。

「お前は、何、だ？」

答えが返ってくる事の無い問い。
奴もまた瀕死なのだ。答える余裕があるなら、その前に私に噛みつくだろう。
ただのモンスターではない事は明白。
物語の中だけに登場する、意志を持つドラゴン。恐らくは、そういう類の物なのだろう。

「なら、その生き血を浴びた私は、不死身、か。なら、あと一回くらい、動けるね」

身体の影になって無事だった腰のポーチから、クーラードリンクを2本取り出す。
飲むのではない。今体内で渦を巻く熱は必要なものだ。冷ましてはいけない。
私は全身にできた火傷への応急措置として、焦げた鎧を剥ぎ取るとそこにドリンクを流しかけた。
もう一本は兜を脱いで頭からかぶる。奴の血がしみ込んで赤の増した髪の間を、シャーベットのようなドリンクが流れ落ちていく。
そして既にスキルを失った兜をそこらに放り、代わりに炎の衝撃でドラゴンの口から抜け出た黒刀を手にとって、奴と向き合った。

『フウゥゥゥ……』

「そっか。お前もあと、一回か」

脱力した身体をくの字に曲げた膝で支え、黒刀の切っ先を地面につけて柄を軽く握る。

スタンスは、右足を少しだけ前に出した四股立ち。太刀使いの基本の構え。

いつものような流れる様な連撃など、この真っ赤な腕では放てなくても、まだ私には無事な脚がある。

ドラゴンは血の滴る口を軽く開き、荒い息を放ちながら爛々と光る隻眼でこちらを睨む。

ところどころを裂かれた丸い身体は、それも威を失わない。

力を溜めこんだ後ろ足とそれをコントロールする前足は、脳髄からの指令を待って小刻みに震えている。

「おいで。最後まで、付き合ってよ」

私の身体が僅かに傾いた。

瞬間、勝敗が決する。

正に消える程の猛速でドラゴン迫る。そして首を唸らせて、全開まで開いた顎で、私のいた場所と、その左側の空間を薙ぎ払う。

私が潰した左眼の死角。ドラゴンはそこを、気配だけで噛み砕いた。

しかしこそこに、私の身体は無い。

身体を前に倒し、体重を脚に移した私が踏み切った方向は、潰した眼とは逆の方向。
前足の先に在る、最も踏み出しやすい右側の空間。
最後の最後で私が選んだのは、敵の弱点を突く事ではなく自分の技量を信じる事だった。
それが、勝敗を分けたのだ。

「■■■■■■■■■■■■■■――――――――っっ！！」

何と叫んでいたのかは、自分でも解らない。
解るのは、確かに己の魂が震えたという事。
この時、私は本当の意味で“絶頂”を迎えた。

前に踏み出すと同時に、肩に背負った刃を撃ち落とす。
首を私とは反対側に巡らし、伸びきった首を私の眼が捉える。

刹那を一瞬に感じる。一瞬を一秒に感じる。
空気を裂いて奔る刃の遅さがもどかしい。

全力で振り抜き、カマイタチすら起こす様な刃は、ピンと張ったドラゴンの皮膚に達し、斬り裂く。
鱗、皮、表皮、真皮。
筋肉、血管、腱。
骨、食道、そしてまた筋肉、血管……
三日月を描いて振り下ろしたた黒刀は、最後の力を振り絞りきって弛緩したドラゴンの首を、一息に断ち切った。

「あぁ　――――」

ドラゴンの首を斬り終えた瞬間、身体からドッと力が抜けた。
目の前が揺れる。
忘れていた火傷の痛みがぶり返し、一呼吸ごとに空気が喉のささくれを撫で上げる。
太刀を手放し、膝に手を置いて身体を支えた。

『――――――――――――』

ふと見ると、頭と胴を分けられてなお意志を手放さないドラゴンと眼が合う。
果てるまでの数秒間、ドラゴンは無念と呪いを込めた眼で私を見続け、逝った。
こいつが何を思って私と対峙していたのかを知る術はもう無い。

「は、はは……」

そして、何を護っていたのかを知る必要も、もう無い。
私は頂点を知った。自らの絶頂を感じた。

「は、は、」

数歩たたらを踏んで、地面にへたり込んだ。そのまま背中を壁に預けて、眼を瞑る。
ハンターになってから１０年と少し。
比喩でも何でもなく命を奪いながら生きたのだから、この日が来るのは解っていた。

私も、今日で終わる

敗者は死に、勝者は生きると言うのなら、これはとても私らしい死にざまだと思う。

誰かを救う訳ではなく、誰かに頼まれた訳でもない。自分勝手に刃を振い、理不尽な死を相手に与えた。

「よかった」

近い将来。

私は鮮血以外に、生の実感を得る事が出来なくなるという予感がある。

そう成った時の私は、きっとヒトをやめているだろう。

火竜よりも、古龍よりも強い存在がいる事を私は知っている。

だから、そう成った私はきっとそれを狙う。相手の事も、相手の背景も顧みることなく、己の快楽の為に同族を狩る存在に成る。

その前に、自分を止められて良かった。今なら人として、モンスターハンターとして逝ける。

「じゃあね、おやすみ」

誰に言うも無く私は呟いて、眼を閉じた。

温かい。
そして柔らかい。

傷の痛みも、火傷の厚さも、失血の冷たさも無い。
まどろみの中で、それだけを身体に感じた。

薄く開いた瞼の隙間から見えたのは、女神の姿。
黄金を泡立てた様な輝きが、私の胸に身を寄せている。
手触りのよい薄手の服を纏う女神が、岩肌に身を預ける私に寄りかかる様にして身体を丸めている。
よく見れば私の身体には上質な毛布がかけられていて、その上から私の腹を枕にして少女が眠っているのだ。

「おい――――」

起こそうと声を出して、声が出た驚いた。
何度も炎を浴び、最後の最後で特大の火炎さらされた私の喉は焼け爛れているはずなのだ。
倒れる直前の、裂けるような痛みを私は忘れていない。

精神の力で痛みを感じなくなっても、身体は決して傷を忘れないはずだ。

「なぁ、起きてくれよ」

毛布から腕を出して、華奢な少女の肩を掴む。
まるで魔法だった。腕にも、肩にも、火傷どころか傷一つない。
ぼろぼろに焼け焦げたナルガ装備だけが、目の前に横たわるドラゴンとの戦いを証明している。

「んむぅ……あ、眼を覚まされましたか？」

不意にドクンと、ひと際高く心臓が鳴った。
鈴を転がしたような声。１４，５歳の少女特有の細く滑らかな体つきによく似合う高いソプラノの音色。
そして黄金の髪に合せた様なエメラルドの瞳が私を射抜いた。

「あ、う――――――」

言葉が喉につかえる。
何故この少女を見た瞬間に女神と誤認したのか。その理由を思い知った。
美しくきめの細かい肌と、金糸の髪。
ゆったりと開かれた緑の瞳は大きく、そして吸い込まれそうになる。
整った顔に、少女のあどけなさを残す彼女は、どんな絵画よりも美し鮮烈だった。

「あの、傷は大丈夫ですか？
父より頂いた、瀕死の人間の傷も癒すという秘薬を使ったのです

けれど、私はそんな傷を負った事が無いものですから……」

「あ、ああ。うん、大丈夫だ」

少女が身体の上から退くのを待って、身体を起こす。

岩肌で寝ていたせいで多少身体が軋むが、裂傷や火傷の刺す様な痛みは全くない。

出血が止まっているどころか、私の身体には傷一つ残っていなかった。

「ねぇ、貴女は誰？　私に何を使ったの？」

飲み干せばたちどころに体力とスタミナを回復させるいにしえの秘薬も、あれ程深い傷を完治させることはできない。

しかし目の前の少女は、そんな代物を父から貰ったと言う。

「あぁ、申し遅れました。

わたくしは、ラダトーム王国第一皇女、ローラ・ラダトームと申します。

そして私が貴女に使ったのは、世界樹のしずくという秘薬です。

この薬は、私の父である王が、もしもの時の為にと去年の誕生日に私に譲ってくださったので――――――――」

地面に座ったまま姿勢を正し、順序立てて今の状況を語る彼女の言葉を聞いて、絶句した。

ラキアという自分の名前と身分を、どもらずに言えたのは奇跡に近い。

王女？　王国？

そのどれもが信じられず、けれど目の前に居る少女には、それを納得させるだけの存在感があった。
少女の奥に横たわるドラゴンの死骸と血の臭いは、これが夢である事も否定している。
混乱して真っ白になった私の頭には、ただ少女の声だけが響いた。

「私、生きてるんだよね」

だから思わず、そんな言葉が口から零れた。
その言葉に少女、いやローラはきょとんとした表情で言葉を止める。

「はい、生きておいでです」

次いで少しだけ首を傾け、目元を緩めた優しい表情で、私の疑問を解消した。
彼女の言葉は私の胸にすとんと落ちて、不思議なくらい心が凪いだ。

「そっか……」

喉の奥から洩れる息とともに、全身の力が抜けた。
今初めて、私は今の状況を理解した。
ドラゴンとの戦いで命を使い切った私は、目の前の少女にもうひとつ命を貰ったのだ。

「貴女のおかげで、どうやら私はもう一回生きられるみたいだ、ありがとう」

「いいえ、お礼には及びません。

わたしくしは勇者さまに命を救っていただいたのですから」

ゆったりとした柔らかい口調でローラは言葉を紡ぐ。

その言葉に混じっていた、聞きなれない単語に私は思わず聞き直した。

「勇者？」

「はい。竜王に囚われた私を救い出してくれるのは、きっと伝説の勇者さまなのだと思っていました。

けれど、酷い傷を負いながらもあのドラゴンに向き合う貴女さまを見て思ったのです。

血を流す痛みに耐えながら、目的を達するまで戦う事を止めなかった貴女こそが真の勇者さまであると」

これまでに無く力強い口調で、ローラは朗々と言葉を繋いだ。

考えてみれば、この少女はたった一人でうす暗い穴倉の中に監禁されていたのだ。

後の交渉を考えれば無碍には扱われなかっただろうが、それでもこの年齢の少女にはとても耐えられる事では無かっただろう。

けれど王女という立場故に、自害も屈服も赦されない。この少女は、そんな状況でもただ気丈に耐えた。

そして高貴な姫でありながら、私が倒れているのを見てたった一本しかない魔法の薬を惜しげもなく使った。

あのドラゴンが奪い返されないよう守っていたのは、この気高き少女だったのか。

「強いな、貴女は」

この少女は、私などよりもよほど心が強い。

そういえば私も最初は、正義感からハンターを志したのだった。
幸か不幸か私の中には才能があって、武器を手にしてモンスターを狩る仕事についた。

けれどその過程で、私の目的は変っていった。
人を護るという最初の志は幾度も浴びた血によって塗りつぶされ、相手の死と同時に感じるゾクゾクとした生の実感が私を狂わせていった。
でも止まることなど出来なくて、いつか戦場で死ねば、それが報いになると思いこんでまた狩りに出かけていた。

そして今日、私は死んだ。けれど生き返った。
生き返って初めて、生きていてよかったと心から思えた。
なら、この命の使いどころは決まっている。
私の目の前にいる、奇跡の様な少女の為に使いたい。

「なぁ、ひとつ教えてくれないかな。
私は貴女に貰ったこの命を、貴女の為に使いたい。
そんな時、私はどうすればいい？」

「――――――――　それは、わたくしの近衛騎士になりたいという事ですか？」

私の言葉を理解したローラは、数秒の間を開けてから問いを返してくる。
その問いに、私は頷いた。

「勇者さまがそのような事をなさる必要はありません。
その御心がおありならば、どうか私を救い出してくださったように、この国を救ってくださいませ。

この国は今、開闢以来二度目の危機に瀕しているのです」

「違うよ。私がそこのドラゴンを殺したのはただの私欲さ。貴女がここに囚われている何て事、私は全然知らなかったから。
貴女が望むのなら、私は剣を取るだろう。けどそれは国の為じゃなくて、貴女の為だよ。
私は生涯をかけて、この命をくれた貴女を護りたいと思う。駄目かな？」

今までの私は、人々を守ると言い訳しながら、命を狩ることを第一として戦ってきた。
けどこれからは、私はこの恩人のために生きたいと思った。
変わってしまった最初の思いは、今確かにある。けれどもうひとつ、新しい想いが胸の中に存在する。
モンスターを殺し続けて、磨き上げた血塗れの腕でも護れるものはあると信じたい。

「それは、本気、ですか？」

「ああ、そうだ」

沈黙が落ちる。
突然にこんなことを言われて、ローラが戸惑うことくらい想像できていた。
だからじっと待つ。
返答がどうであれ、それを聞かないと私は先に進めない。先延ばしになど出来るはずが無い。

「わかりました。ならばわたくしも、貴女に一生護られる事にします。

けれど誤解なさらないで下さい。
わたくしの命を救ってくださったのは、間違いなく貴女です。ですから、」

しばらく続いた沈黙を破り、ローラの口から流れ出したのは了承の声だった。
彼女ははっきりとした口調で私の無茶をすべて飲み込み、その上で自らの想いを伝えようと右手を伸ばす。

「騎士ではなく、お友達になっていただけませんか？
友人とは、互いを尊重しつつ高めあう関係だと教わりました。
貴女がわたくしを護ってくださるとおっしゃるならば、私はこれから何があろうとも貴女を信じようと思います」

「ははっ、それはいいね。よろしく、ローラ」

お互い洞窟の床に座ったまま、私たちは手を握り合い、笑いあった。
目の前のローラの微笑みには、たぶん相手を幸せにする力があるのだろうと思う。
その奥にある気品と王族の風格が、彼女の最大の魅力だった。

「とりあえず、出ようか。私の家はこっちにないからさ、ローラのお家に行っていい？」

手を握ったまま立ち上がり、ローラの身体を引き起こす。
そして洞窟での生活で衰えた彼女の身体を抱え上げ、いたずらっぽくそう尋ねた。
彼女もその冗談に気づいてくすりと笑ったあと、いいですよと応じ、私の首にしがみつく。

ぼんやりと青白くコケが光る洞窟を抜け、沼地を越えたとき、薄暗かった周囲が光を浴び始める。
東の海の彼方から、黄金色の太陽が姿を現した。
草原に自らの足で立ち、太陽の光を全身に浴びるローラは、やはり身がすくむほど綺麗だった。

「そういえば。わたくしは近い将来に結婚する事になります。
妻を守るのは夫の役目。
しかもその相手が勇者さま、いえラキアよりも強かったら、どうされます？」

「そりゃぁ……そうだな、英雄色を好むっていうからね。
その時はそいつが浮気をしないように見張ってやるよ」

「ふふっ、なるほど。それはいいですね」

朝日の中で、二人で笑いあう。
徐々に世界は明るさを取り戻し、私の脚はこのアレフガルドの地面を確かに捉え、ローラの下に歩み寄った。

「ローラ、これからよろしく。絶対に護り抜くから」

「はいっ、よろしくお願いします。頼りにしますよ」

―――――――

これより後、目の覚めるような青い鎧を纏う真う青年が、ローラの下を訪れる。
人々の為、世界の為に立ち上がった青年は、幾多の苦難の後に魔の島に渡り、伝説の剣を持って魔族の頂点に座す竜王を打倒した。
彼は国中から勇者と称えられ、英雄となった。
彼の真っ直ぐな心は遂にローラの心をとらえ、二人は伴侶となる。
そして彼は自らの国を探すと海を渡る。
勇者としての名声と己の才覚を持って争いの絶えない新大陸の部族を纏めあげ、国家を成した。

国の名をローレシア
王の名をアレフ

だがしかし、勇者ロトの血を引く勇者王と誰もが呼ぶ中、ただひとり、妻のローラだけは彼を勇者とはただの一度も呼ばなかったという。
それを娘の一人が問うた時、彼女は苦笑いをしながらこう言ったという。
「わたくしが『勇者』と呼ぶのは、ただひとり。
流れる血の痛みに耐えながらも、強大な存在に立ち向かい続けた女性だけですから」
紅茶を飲みながら、そう言った彼女の隣の席には、それを刃歯がゆそうに聞く赤髪の女性がいたという。

黒と紫の刃を背に負った女戦士は、最後まで騎士を名乗ることなく、ローラの友人として、彼女を護り抜いたのだ。

その命が、終わるまで。

後編『女神』（後書き）

――――――――――というわけで、モンハン×ドラクエの二次でした。

※同一作品は『Ａｒｃａｄｉａ』さまにも掲載させて頂いています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6790m/

異世界 と 竜狩人

2010年10月10日21時21分発行